葛城山東北麓における初期群集墳の展開

伊藤雅文

一　はじめに

六世紀前・中葉に出現し、発展する群集墳は全国的な規模でみられる一方、五世紀代築造の小古墳が七～八年前から注目されるようになった。この小古墳は主として木棺直葬をもって埋葬主体とし、限られた地域にのみ出現するという点を除き、後期群集墳とは景観的要素において同じである。

石部正志氏は、これらを古式群集墳と提唱した。[1] そして、方形周溝墓が古墳時代にも築造されている事実から、首長に昇華できなかった世帯共同体の家長墓にあて、それが「古式群集墳」へと発展したと説いた。石部氏の試論は、マルクス理論に立脚した家族の自立化に関する理論的側面を強調したものであり、なお十分な個別的検討が必要であろう。またこれより先、関川尚功氏は古市・百舌鳥古墳群に平行する時期の群集墳に留意し、「初期群集墳」と呼称した。[2]

その後、初期群集墳に具体的な検討を加えた寺沢知子氏は、副葬品の分析から古墳群の構造を探ろうとした。[3] 筆者も同じ方法論であるが、寺沢氏が分析した新沢千塚古墳群は、群構造を理解するには、細かな築造単位を把握しにくく、調査も古墳をアトランダムに抽出したものであるので不適当である。したがって導き出された結論は、副葬類型の差を論じたものではなく、一般的概念を述べるにとどまり、新沢千塚古墳群と石光山古墳群の差異を指摘したものである。

以上若干の研究小史を概観してきたが、三氏が述べているように、横穴式石室を主体とする群集墳と木棺直葬等を主体とする群集墳の間には少なからずの相異が存在する。したがって、筆者も前者を初期群集墳、後者を後期群集墳と理解したい。

最近、近藤義郎氏が集計した大和の「古式小墳」は三千数百基以上あるという。[4] しかしそのほとんどが葛城山東麓から三輪山南部の丘陵に存在し、盆地内部の分布は極めて不均等

な状況にある。都出比呂志氏が「群集墳の早く形成される地域の特殊性を……究明すべきであろう」と述べたように、[5]よりいっそうの古墳群の細かい分析作業が必要である。

したがって、比較的地域としてのまとまりのある葛城山東麓に照準をあてて、群集墳の分析をおこない、地域社会の中における群集墳の位置づけをおこないたい。

二　副葬類型

群集墳の場合、古墳間の差は墳丘規模・葺石等の附属施設の有無を検討し比較するよりも、副葬品から検討する方がより妥当であると考える。また大型古墳の墳丘規模の差にはその造営労働力の差が考えられる。少なくとも、畿内において、主軸長二〇〇メートルの古墳と一〇〇メートルの古墳の間、もしくは同等の規模を有する古墳間にあっても、丘陵・尾根を有効に使う地山削り出しの古墳と、平地上のすべて盛土による古墳とでは、その労働力の差は大きい。しかし、群集墳中のほとんどの古墳は直径十数メートルないし三十メートル程度の地山削り出しによる構築であり、その造営労力の差は極めて少ない。

小古墳の埋葬施設として、木棺直葬・粘土槨・竪穴式石室小石室・壺棺・円筒埴輪棺が検出されているが、これらは古墳群間の偏差が大きく、分析にはやや不適当であろう。したがって、ひとつの古墳群（群集墳）の構造を追求するには、副葬品による主体部間の分析が有効であると考える。

副葬品は、墳形・葺石・埴輪列などの外部施設、埋葬施設、周溝・外堤などの付属施設とともに、古墳を成り立たせる重要な一要素であり、被葬者の生前の社会的地位を反映している。その副葬品には個人の所有物であるとか、祭具であるとか、あるいは「死」に際して破棄されてしまったものがあるだろう。生産性が低く自由な流通がなかった古墳時代にとって、副葬する物資を補充することができるかどうかが非常に重要な問題である。副葬行為は物資を地下に埋納するという永久放棄であり、当時必要なものをむやみに埋納することはできないであろう。

また、副葬品の埋納にあたってその種目の選定がおこなわれたであろう。たとえば石上・豊田古墳群では鉄鏃、石光山古墳群では農工具の占める割合が大きい。しかし、被葬者の社会的背景として所有物・物資の相対的な多寡により選択できる幅が相対的に広くなったり狭くなったりするので、分析する古墳群の副葬品の傾向を把握さえしていれば、さほど問題にはならない。

以上の点を踏まえて次のように分類可能である。

A類　鏡を有する。

B類　玉類を有する。

C類　鏡・玉類を持たない。

1類　石製品・銅製品・大型武器・武具・馬具のうち複数を有する。
2類　右記の遺物のうちいずれか一つを有する。
3類　鉄鏃・農工具・土器等のうち、少くとも一つを有する。
4類　棺外遺物のないもの。

A～C類はほぼ棺内遺物、1～4類はほぼ棺外遺物に対応し、[6] 実際の主体部の副葬類型は二者の組合わせによって表現される。例えば、A4類とは鏡のみ有する主体部であり、B3類とは玉類と刀等の鉄鏃・農工具を有する主体部である。なお、本稿で使用する時期区分は中期中葉を一期、須恵器Ⅰ型式後半[7]までを二期、同Ⅱ型式までを三期とする。

さて、鏡(特に三角縁神獣鏡)、甲冑・石玉製品、銅製品等は中央政権との関連を示していると考えられている。この遺物群はどれも特殊な技術が必要であり、文献上でも「鏡作部」、「韓鍛部」、「玉造部」が散見し、実際、鏡作神社あるいは玉作の地名が現在に至るまで残っている。初期群集墳の鏡の占める割合は、新沢千塚古墳群では五〇〇号墳を例外として五六主体部中六主体部と約一割であり、兵家古墳群では一〇主体部中三主体部、巨勢山古墳群では一五主体部中一主体部、石光山古墳群にいたっては鏡を有する主体部は皆無である。[8] このように鏡の出土頻度数は低く、群中では特別な構造の主体部といえる。前期、中期、後期と鏡の持つ意味・存在意義は変化し、後期の副葬例は極端に減少するが、鏡の出土状態から見る限り特別なものであろう。同様のことが筒形銅器などの銅製品、武器類(特に鹿角装刀剣類)に言えるだろう。A・B・1・2類において注目した遺物群すべてとはいかないまでもその多くが特別なものであり、中央政権とのつながりを想定できる。

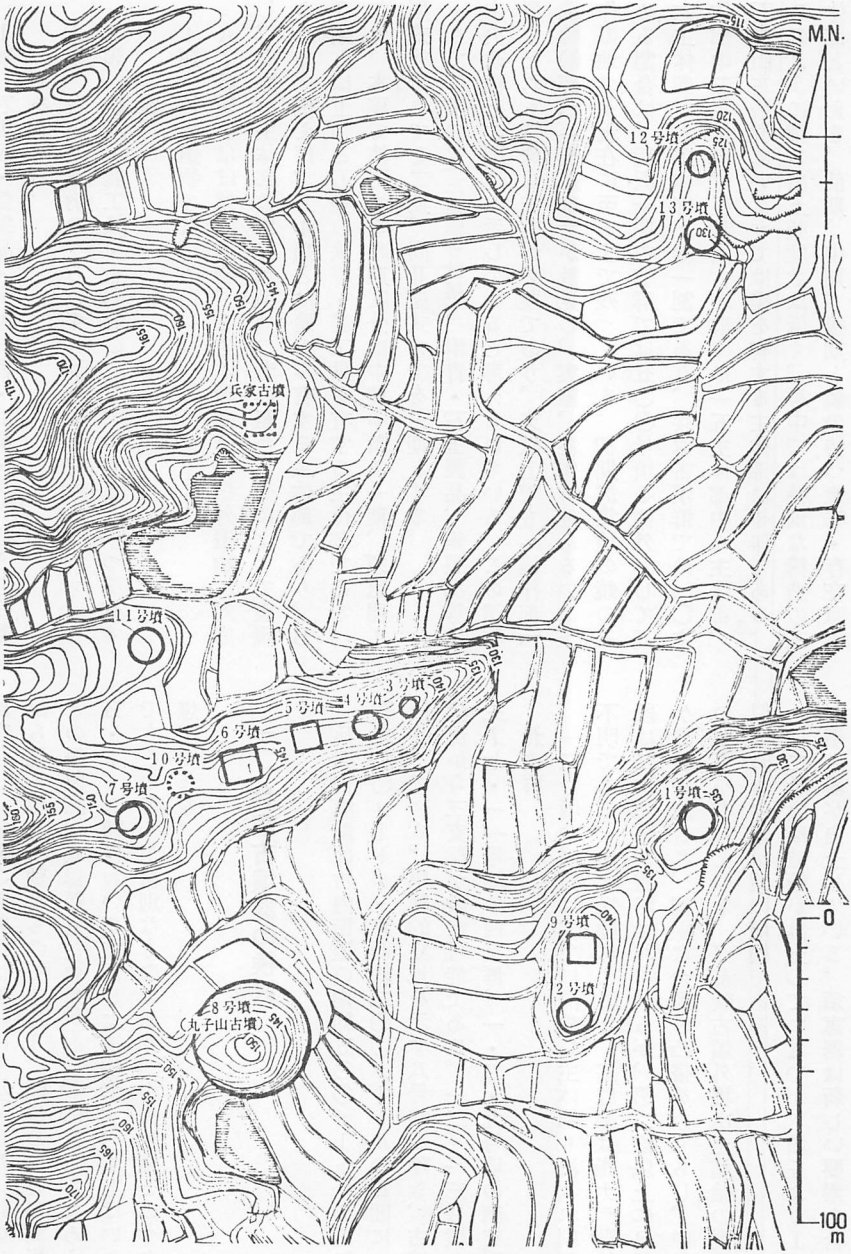
三　兵家古墳群の検討

兵家古墳群[9]は竹内街道の南約五〇〇メートルの所に、南北約三〇〇メートル・東西約二〇〇メートルの範囲に一四基が散在している。単独的立地を示す八号墳を除き、古墳の立地状況から三支群が設定可能である。一二・一三号墳の北支群、三～七・一一号墳の西支群、一・二・九号墳の南支群である。

北支群

一三号墳の墳丘はすでに流失し主体部も流され副葬内容は不明である。出土埴輪によると、基底部は指ナデ調整で最下段は二次調整が省略されているが、第二段以上にB種ヨコハケ調整が施され、偏平な台形の凸帯をめぐらし、中期の埴輪の要素を有している。[10] 允恭陵古墳外堤出土埴輪[11]の調整技術に似ており中期後葉の埴輪であろう。

一二号墳は埴輪が出土していないが、墳丘よりⅠ型式後半の須恵器が出土している。須恵器は新しい要素を含んでおり、



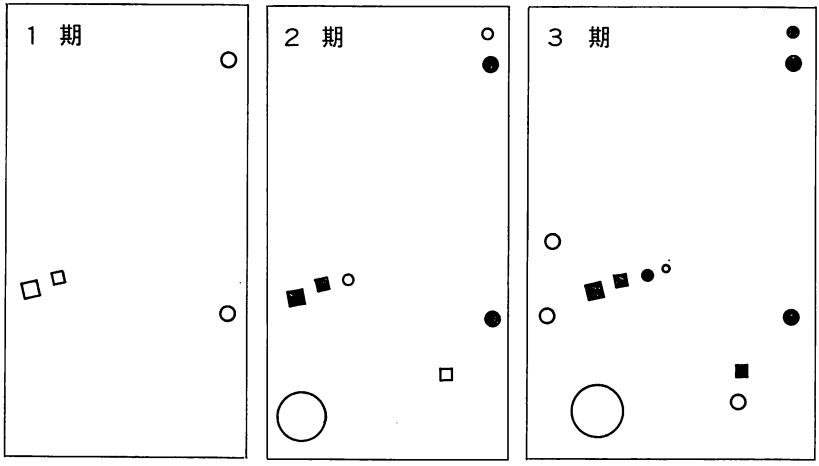
第1図　兵家古墳群測量図

第１表　兵家古墳群群構造

支群／期	北	西	南
1	13 ○ A1?	5 □ A1　6 □ A1 ⋮ A.B.-C1	1 ○ A1
2	12 ○ B1	4 ○ C4	9 □ C4
3		3 ○ C3 ⋮ A.B.-C3　7 ○ ?　11 ○ B2 ⋮ A.B.-B3	2 ○ ?

古墳番号 —1 ○ A1 —副葬類型　—墳　形

A.B.…追　葬



○ 新しく築造された古墳

● 既に築造された古墳

0　100 m

第２図　兵家古墳群の築造過程

Ⅱ型式に近いものであろう。長方板革綴式短甲・小札鋲留式眉庇付冑・頸鎧・肩鎧・剣・鉄鏃・農工具・管玉・ガラス丸玉を副葬するB1類である。甲冑はほぼセットの状態で出土し、群中において一二号墳の武器・武具の占める割合が大きい点が注目されるが、中期末葉という築造年代を考えれば旧式の武器・武具のセットといえる。[12]

一二号墳と一三号墳の築造年代はどうであろうか。群中において、埴輪と須恵器の伴出例は二号墳のみで須恵器はⅡ型式である。一方、石先山一七号墳[13]ではⅠ型式後半の須恵器（Ⅱ型式に近い）を出土し、つぶれた凸帯と二次調整を省略し若干左上りのタテハケ調整を施し、底部調整された埴輪も伴出している。同八号墳では一七号墳より若干新しい埴輪とⅡ型式の須恵器を伴出し、同二〇号墳では一七号墳より若干古い埴輪（一三号墳よりも若干新しい）とⅡ型式の須恵器を伴出している。少ない例ではあるがこれらから帰納して考えれば、兵家一二号墳、石光山一七号墳の須恵器が中でも古式の要素を持つものであり、ほぼ同年代を示すといえる。また兵家一二号墳の須恵器は墳丘上あるいは墳丘南裾であり、墓壙内出土と異なりストレートに古墳の年代を示すとは断定できない。以上二点より一二・一三号墳はまさに須恵器を用いた祭祀の導入の過渡期にあたり、ほぼ同年代といえるだろう。しかし、須恵器という新しい要素を持つ一二号墳は古い要素を持っている一三号墳よりも新しいと考えたい。

南支群

二・九号墳の遺存状況は悪い。二号墳の主体部は中世墓により完全に破壊され、鍬先・須恵器・埴輪が出土しているのみである。元来埴輪が樹立されていたかは不明であるが、須恵器は典型的なⅡ型式のもので二期に編年される。

九号墳は辛うじて主体部が遺存している。棺内は無遺物であるが、副葬品があった可能性はないだろうか。一・五・六・一一号の各墳の棺内での遺物の出土するレベルは床面直上がほとんどである。埋納位置の高い須恵器[14]が遺る可能性よりも、刀・剣・農工具等の埋納位置の低い遺物の方が残る可能性は高く、それゆえ九号墳は元来無遺物であった可能性が強く、副葬類型はC4類と考える。九号墳の主体部は棺床に部分的にではあるが粘土を使用しており粘土槨の形式化したものであろう。この点は後述したい。

一号墳には円筒・朝顔形・家形埴輪が出土している。棺内には五禽鏡・玉類・剣・刀、棺外には鉄鏃群・刀・剣が埋納されA1類である。頭部に推定される部分には水銀朱の散布が認められ、九号墳同様棺床には部分的に粘土が貼られている。時期決定する材料は少ないが、須恵器を副葬していないので、少なくとも一期か二期であろう。報告者も述べているように五禽鏡の年代を五世紀中葉とすると一期になる。しかし、形式的な粘土槨、円筒埴輪が一三号墳とよく似ていることから、一期でも二期に近い時期であろう。

西支群

西支群に六基が築造され群中の過半を占める。

六号墳には円筒埴輪列が巡らされ、形象埴輪も家形・蓋形・冑形埴輪と多彩である。主体部は二基あり、東主体部が竪穴式石室、西主体部が木棺直葬である。東主体部である竪穴式石室の床面長二三八センチ、同幅六〇～六六センチとかなり小規模である。これは小林行雄氏のいうA群[15]でも小型の部類に入り、石室高も低く石蓋ではなく木蓋であったと推定されているように、伝統的な竪穴式石室の簡略形式である。東主体部から変形四獣鏡・硬玉製勾玉・管玉・形式不明の革綴式短甲・大形武器・農工具等を出土するA1類である。硬玉製勾玉・鋳造鉄斧と一見古相の副葬内容である。西主体部は滑石製刀子形石製品・刀剣・農工具等を出土するC1類である。

副葬品から東西両主体部の先後関係を決定するのは困難であり、墳丘中央に相並んで埋置されていることから二棺埋葬は計画的でありほぼ同時築造といえる。円筒埴輪は一・一三号墳同様、二次調整にヨコハケを施し台形の凸帯を有しⅣ期の埴輪であり、しかも須恵器を埋納していないことから一期築造と考えられる。東主体部に木棺直葬が採用されてもおかしくないのに、竪穴式石室という伝統的埋葬形態を採用している点で、より首長墓的要素が強く、木棺直葬よりも優越していると考えられ、西主体部は追葬的存在と推定できる。

五号墳は円筒埴輪列を巡らし若干の形象埴輪も出土している。埋葬施設は西側の小口以外の棺の三方及び棺上に粘土を貼り付けたもので、粘土槨の一種であると考えられる。報告者はこの形式を木棺直葬と理解している。しかし鞍塚古墳のように中期中葉の第一級古墳において棺の両小口に粘土塊を置く簡略形式の粘土槨を採用している。また使用する粘土の量は少ないが棺の保護・安定を目的に粘土を用い、同時代既に完成された姿の木棺直葬が存在するにもかかわらず「粘土槨」を採用している。後述するが副葬品相においても区別されたものであり、本論においては粘土槨として理解した。五号墳は波文帯方格規矩鏡・変形四獣鏡・勾玉(滑石製を含む)・滑石製紡錘車・刀・農工具等を副葬するA1類である。鋳上りの悪い仿製鏡ではあるが、鏡を二面も持ち、群中では唯一粘土槨を採用し特異な存在といえる。円筒埴輪は六号墳同様Ⅳ期の埴輪であり、一期築造と考えられる。

四号墳は床面長九〇センチ、同幅三〇センチの竪穴式小石室[16]を採用している。石室内は無遺物であったが、墓前祭祀に使われたと考えられる須恵器群があり、それから二期築造のC4類の古墳である。

三号墳は東主体部の竪穴式小石室・西主体部の木棺直葬と二基の主体部が検出された。東主体部からは鉄鏃二本が出土し、西主体部からは、主体部の約二分の一が乱掘されているので、正確には知りえないが遺物の出土状況からほとんど副

葬品を持っていないと推定でき、ともにC3類である。出土した須恵器より三期築造である。東主体部は墳丘裾近くに造られ、追葬的存在である。

一一号墳は西支群から若干離れているが、古墳の所属を明らかにするために最も近い西支群に含めた。主体部は二基検出され、東主体部から轡・切子玉・琥珀玉・農工具等を出土し、西主体部は土製丸玉・鹿角装刀子等を出土している。須恵器から両主体部とも三期以降の築造である。つまり、兵家古墳群において最後出のものである。副葬品もやや貧弱でそれぞれB2・B3類、東主体部には馬具ということ新しい要素がみられる。遺物相から西主体部が追葬的存在と考えられる。

三支群はそれぞれ一期には古墳営造が開始され、その副葬類型はA1類である。支群中にあっては優れた副葬内容であり、各支群形成の核となったことがわかる。二期以降にはA類の主体部との副葬品の量的な差は大きく、一二号墳で玉類・甲冑を出土しているにすぎない。

埴輪を樹立する古墳は五基と約三分の一を占めるが、攪乱の甚しい一三号墳と埴輪の有無の不明確な二号墳を除くと、一二基中三基となり、一般的ではない遺物といえる。三基はいずれもA類で、築造時期もほぼ一期に限られる。一号墳の主体部には水銀朱の散布が認められ、五・六号墳は特殊な埋葬施設を採用していることから首肯できる。埴輪を樹立する理由の一つには、須恵器を用いた祭祀を導入し盛行する以前の古墳である、という時期的な考え方があるだろうが、それ以上に、二期以降鏡の埋納がみられず、また兵家古墳群において埴輪は特殊な遺物であることから社会的な考え方も可能である。すなわち、南支群ではA1類以降C4類と続き、西支群ではC4・C3・B2類と続く。一期と二期とは副葬品の質・量とも大きな差がある。一方北支群ではB1類と続き、二古期の間には大きな格差はない。南・西支群では限られた人のみが埴輪を立てることができた、という社会的考え方が可能であり、北支群では反対に時間的な考え方が妥当であろう。

追葬は西支群の六基中三基にみられるにすぎない。兵家古墳群よりも若干新しい石光山古墳群の追葬の在り方は、一次埋葬が木棺直葬の場合追葬も木棺直葬という例は少なく、大部分が竪穴式小石室・土器棺・埴輪棺であって、その埋葬位置も墳丘裾に多く、副葬類型はC4類が多い。初葬者と追葬者との差は歴然としている。

一方兵家古墳群の場合はどうであろうか。三号墳の追葬主体部である竪穴式小石室は初葬の木棺直葬と同様C3類と遺物出土量は同程度で、ほぼ同時築造である。六号墳も前述したように極端に見劣りする追葬墳ではない。一一号墳も基本的に同傾向を示す。若干他と異なる点は、第一主体部は琥珀玉・水晶製切子玉を有するが、第二主体部は土製丸玉を有する点である。前者は玉造り集団によって製作され、特別に入

手せねばならぬという玉類であるが、後者はいわば各個人が製作できる玉類であり、両者の間には少なからずの差が認められる。つまり、兵家古墳群では追葬が初葬よりも若干劣る存在であるが、石光山古墳群のように極端に劣るものではない。しかも、その築造期は初葬のそれときわめて近い。兵家古墳群の築造過程は第二表より明らかである。

北支群は一三→一二号墳・南支群は一→九→二号墳と単純に継起し、各時期を二五～三〇年に考えれば、ほぼ一世代一墳となり、一つの流れで把握できる。西支群では若干複雑な様相を呈している。すなわち、前述した群中におけるA1類の優越性と、A1類墳が同時期に二基存在するということは、二つの「小集団」による築造の流れの存在が仮定できる。

八号墳は群中において独立的立地を示している。発掘調査[17]がおこなわれていないので詳細は不明である。二塚古墳後円部とほぼ同じ形状を呈しているので、本墳も横穴式石室を内部主体としている可能性がある。畿内への横穴式石室の本格的な導入時期が五世紀後半以降であることを考えれば、[18]八号墳は二期以降の築造であろう。

四　的場池古墳群の検討

的場池古墳群[19]は兵家古墳群の北側にあり、兵家古墳群に含めて考えることも可能であろう。しかし、後述するが古墳の在り方が大きく異なるので、一古墳群として扱った。

的場池古墳群は一尾根上に位置し、一見一支群の在り方を示す。主脈に立地する七・八号墳および分岐派生する北側尾根に立地する六・九号墳と、小支脈上の一～五号墳との間が、群中の古墳間よりも若干広く開いており、そこに支群の境界を見い出すことができる。したがって、一～五号墳を東支群、六～九号墳を西支群として理解したい。なお、七世紀築造の一〇・一一号墳は除外した。

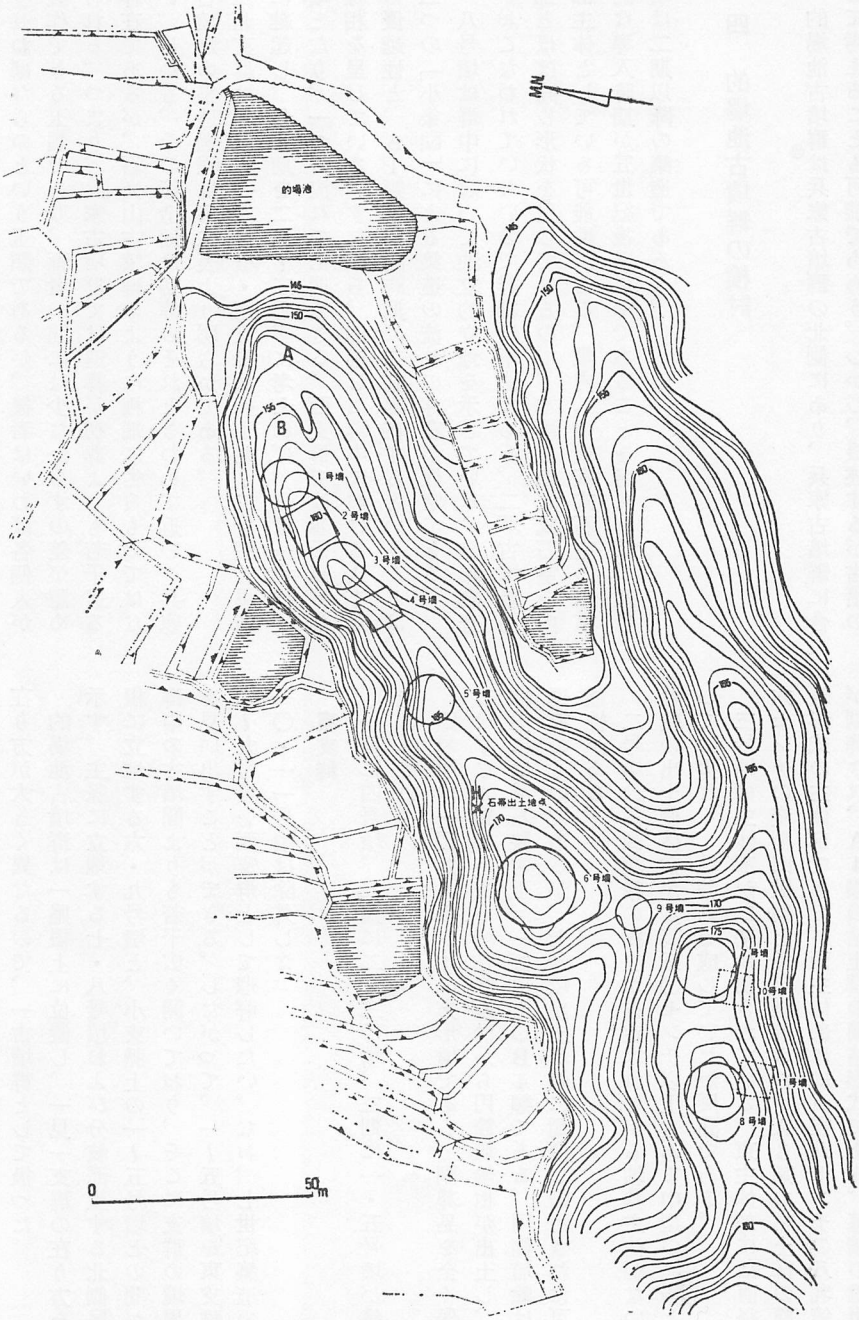
東支群

一期に四号墳、二期に二・三号墳、三期に一・五号墳が築造されている。

四号墳は一辺九メートルの方形墳である。副葬品を全く保有せずC4類である。墳丘区画溝から円筒埴輪棺が出土し、棺内には滑石製勾玉が一個出土しB4類である。円筒埴輪は通有のものであるが、七号墳出土埴輪に類似し転用された可能性がある。

二号墳は円筒埴輪の樹立が推定されながら埋葬主体がない。埴輪の出土個体数が器高五〇センチ以上もある中型の埴輪としては少なく、埴輪列を成していたか疑問である。

三号墳は主体部が二基検出されている。東主体部には直径六センチの変型四獣鏡と鎌が副葬され、A3類の粘土槨の簡略形式の主体部である。西主体部には直径八センチの八乳鏡が副葬され、A4類の粘土槨の簡略形式である。墓壙の重複



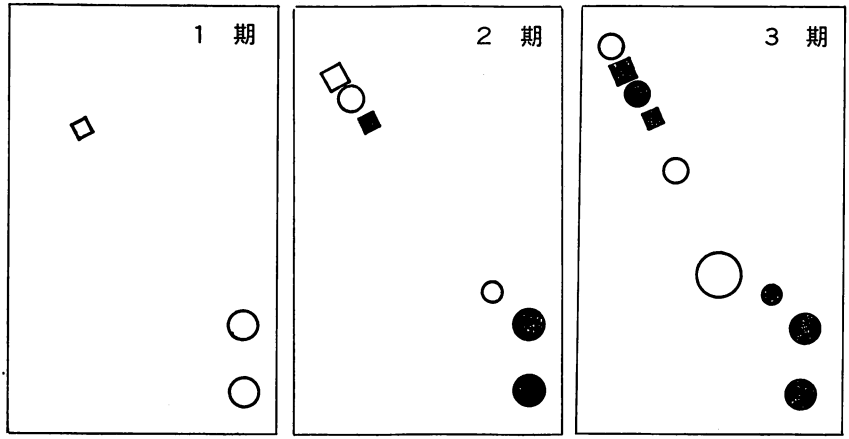
第3図　的場池古墳群測量図

第2表　的場池古墳群群構成

期＼支群	西	東
1	7 ○ C_4　8 ○ B_2	4 □ C_4 ⋮ A.B.-B_3
2	9 ○ B_2	3 ○ A_4　2 □ ?
3	6 ○ ?	1 ○ B_3　5 ○ C_4

古墳番号 — 1 ○ A_1 — 墳形 / 副葬類型

A.B.… 追葬



○ 新しく築造された古墳

● 既に築造された古墳

0　50 m

第4図　的場池古墳群の築造過程

関係から東主体部が先に造られたことがわかる。東主体部の粘土槨は西主体部と異なり、棺の周囲にまばらに粘土塊を置くというものである。

一号墳は、木棺の南側の小口に石を数個重ねるという特異な構造の古墳である。棺内から太手の金環が一対装着状態で出土し、B4類である。須恵器はⅢ型式前半のものであるが、出土埴輪は外面ヨコハケ調整が施された中期的埴輪であるので、両者の間には年代的矛盾が明らかに見られる。墓壙内に埴輪片が散乱している。報告者も推定しているように、古墳の再利用がおこなわれた可能性がある。

五号墳は竪穴式小石室を内部主体とする。石室内にはまばらに石を敷いている。無遺物のC4類であるが、天井石を架する側石・小口石上面にベンガラが帯状に塗られている。

西支群

一期に七・八号墳、二期に九号墳、三期に六号墳が築造されている。東支群よりもひとまわり墳丘規模が大きい。

七号墳は粘土槨の簡略形式の主体部で埴輪を有している。槨内は全く攪乱を被ってはいないが無遺物のC4類である。棺底からベンガラが検出されている。

八号墳は群中で唯一葺石を有する。粘土槨の内には玉類・銅釧・剣があるB2類である。群中で最も豊かな副葬品を有する。

九号墳の立地条件は極めて悪く、そのため直径八メートルと小規模である。粘土槨の内には滑石製勾玉と剣を埋納するB2類である。須恵器が出土していないことから二期築造と推定したい。

六号墳は最大規模の古墳であるが、盗掘によって内部構造・副葬類型は不明である。出土須恵器はⅢ型式前～中を示し、若干降る可能性がある。

総体的に、的場池古墳群は副葬品の量が少なく、その質も兵家古墳群よりも劣る。東支群では「鏡」埋納というわずかに優る内容であるかのようだが、三号墳も含めてすべて3・4類という非常に貧弱な内容である。一方、円筒埴輪が四基あり、兵家古墳群における円筒埴輪の在り方と異る。三・四号墳で追葬がみられるが、初葬と追葬の差は見られずほぼ同等の内容を示し、木棺直葬と他の葬法との差、および初葬と追葬の差は極めて少ない。西支群では、八号墳に副葬品が集中するほかは東支群と同様に貧弱な副葬内容である。しかし、ほとんどの古墳が埴輪を持ち粘土槨を採用し墳丘規模も東支群より一回り大きく、西支群の方が優位に立っていることがわかる。

西支群の七・九号墳は注目できる。七号墳は円筒・形象埴輪、粘土槨、ベンガラという八号墳に共通する要素を持ちながら、C4類である。しかも、両者の間には墳丘規模・立地において差異を見い出しがたい。八号墳がB2類であるので、七号墳のC4類は社会的な背景として、副葬する「物」を持

第3表　兵家・的場池古墳群一覧表

古　　墳	墳　形（規　模）	外部施設	主体部	主　体　部　出　土　遺　物	時　期	類　型	備　　考
兵家　1号墳	円(16)	埴　　輪	木棺直葬	五禽鏡(1)・勾玉(2)・ガラス玉(99)・剣(2)・刀(3)・刀子(1)・鉄鏃(120以上)	1	A 1	水銀朱使用
2号墳	?(?)	埴　　輪	木棺直葬		3	?	
3号墳	円(?)		竪穴式小石室	鉄鏃	3	C 3	
			木棺直葬	(鉄鏃・鎌)	3	C 3	
4号墳	方(9)		竪穴式小石室		2	C 4	
5号墳	円(9)	埴　　輪	粘土槨	変形四獣鏡(1)・方格規矩鏡(1)・勾玉(9)・管玉(50)・ガラス玉(3)・臼玉(171)・石製紡錘車・刀(1)・刀子(1)・斧(1)・鎌(3)	1	A 1	
6号墳	方(13)	埴　　輪	竪穴式石室	変形四獣鏡(1)・勾玉(6)・管玉(41)・ガラス玉(71)・臼玉(1682)・剣(4)・刀(1)・鋳造鉄斧(1)・鉄鏃(11)・斧(1)・刀子(2)・鉾(1)・短甲	1	A 1	
			木棺直葬	石製刀子(10)・剣(1)・刀(3)・鉄鏃(18)・刀子(2)・ノミ(2)・斧(2)	1～2	C 1	
7号墳	円(8)		?		3		主体部流失
9号墳	方(8)		木棺直葬		2	C 4 ?	
10号墳	?						古墳か(?)
・11号墳	?		木棺直葬(東)	切子玉(12)・琥珀玉(12)・ガラス玉(61)・轡(1)・斧(1)・鉄鏃(7)	3	B 2	
			木棺直葬(西)	土玉(63)・鹿角装刀子(1)・刀子(1)・鉄鏃(5)	3	B 3	
12号墳	円	埴　　輪	木棺直葬	管玉(11)・ガラス玉(48)・砥石(1)・甲・冑・付属具・剣(2)・鉋(2)・鎌(1)・刀子(1)・斧(2)・鉄鏃(45)	2	B 1	
13号墳					1		主体部流失
的場池1号墳	円(8)	埴　　輪	木棺直葬	金環(2)	3	B 3	
2号墳	方(11)	埴　　輪			1～2		
3号墳	円(9)		粘土槨(東)	変形四獣鏡(1)・鎌(1)	2	A 3	
			粘土槨(西)	八乳鏡	2	A 4	
4号墳	方(9)		木棺直葬		1	C 4	
			円筒埴輪棺	勾玉(1)	1	B 4	
5号墳	円(11)		竪穴式小石室		2～3 ?	C 4	丹使用
6号墳	円(16)	形象埴輪			3	——	
7号墳	円(15)	埴　　輪	粘土槨		1	C 4	丹
8号墳	円(15)	埴輪・葺石	粘土槨	勾玉(4)・管玉(23)・ガラス玉(21)・臼玉(767)・銅釧(1)・剣(1)	1	B 2	丹
9号墳	円(8)		粘土槨	玉(1)・剣(1)	2	B 2	

てなかった人の墓ではない。九号墳は、他に立地条件のより良い場所があるのに、また他の場所での築造の時間的余裕も少なからずあるのに、劣悪な場所に位置している。副葬品の量は少ないが、それでもB2類である。ただ、七、八号墳に比べて粘土の置き方が粗く、手抜きの感がある。他古墳の被葬者よりも社会的に劣った人の墳墓であろう。

さて、的場池古墳群で出土した宝器的・政治的性格の強い遺物は、三号墳の鏡二面と八号墳の銅釧であろう。鏡は小型品で鋳上りの悪いものである。銅釧も中級品で、他古墳に比べ見劣りする。今田一号墳[20]では甲冑、今田二号墳では滑石製模造品、慈恩寺一号墳では装飾付銀製空勾玉、あるいは新沢千塚古墳群出土の宝器類など、ほぼ同時期の小形古墳の方が優れた遺物を出土している。しかも、これらの古墳群では主体部間の副葬品の優劣の差は大きい。

的場池古墳群にもその差はある。たとえば三・八号墳と他の古墳とである。しかし、その差は非常に不明瞭で、三・四号墳のように追葬の方が極めてわずかであるが、多く副葬品を持っている。すなわち、恒常的な副葬行為が不可能であったと理解でき、被葬者への恒常的な物資の配布、供給を受けることが不可能であったといえる。当然、薄葬指向の強い集団の墳墓であった、という考え方もあるだろうが、八号墳の副葬量は少なくなく薄葬の傾向はみられない。七号墳のC4類もこのような状況を背景としているのであろう。

したがって、ほとんどの主体部が3・4類という清水谷古墳群[21]の様相と類似している。副葬品量の多寡が被葬者の社会的、経済的地位を反映するという本論の前提に立つ限り、的場池古墳群や清水谷古墳群などは、新沢千塚古墳群[22]、兵家古墳群などよりも下位の劣った築造集団といえる。その集団内においても東支群と西支群にみられる差異がある。

五　群集墳と首長墳

まずA1～C1類について考えてみたい。畿内（特に大和・河内）の首長墳の副葬類型はどうであろうか。前期古墳では桜井市茶臼山古墳・茨木市紫金山古墳・桜井市メスリ山古墳・奈良市マエ塚古墳・同市富雄丸山古墳・宝塚市万頼山古墳をはじめとして、ほとんどの首長墳はA1類である。ほぼ同時期である天理市上殿古墳[23]は直径一二メートルであるが、方形板革綴式短甲二領を含む多くの武器を出土するB1類の古墳である。一方、高市郡高取町タニグチ一号墳[24]は直径二〇メートルであるが、吾作銘二神四獣鏡・方形板革綴式短甲等を出土するA1類の古墳である。タニグチ一号墳が位置する巨勢谷には顕著な前期古墳がないので、本墳は巨勢谷地域におけるひとつの首長墳と理解できる。しかし、上殿古墳の付近には東大寺山古墳・和爾下神社古墳などの首長墳が存在するので、本墳を首長墳と考えるには無理があり、社会的に一

段下の古墳であろう。つまり、A1類墳は基本的に首長墳である。

中期前半の古墳では、豊中市桜塚古墳群中の大塚古墳第二主体部・藤井寺市楯塚古墳後円部主体部・和泉市黄金塚古墳東・西槨をはじめとしてほとんどA1類墳である。中期後半から後期前半の古墳では、枚岡市芝山古墳・高石市富木車塚古墳後円部第一主体部・塚山古墳などはB1類墳であるが、藤井寺市長持山古墳や滋賀県高島郡鴨稲荷古墳などではA1類に分類できる。前期と同じようにA1・B1類墳が混在する様相である。後期に至り、鏡を好み副葬する風習が衰える傾向にあり、多くの首長墳の副葬類型はB1類となるが、烏土塚古墳のようにA1類も存在する。中期古墳のA1類とB1類の差はB1類墳の調査例が少ないのでよくわからないが、前期と後期の中間的様相を推定できる。

すなわち、首長墳を一系列に追求できる桜塚古墳群東群では、大塚・狐塚・南天平塚の諸古墳は各々A1類でB1類の主体部は存在しない。一方、社会構造が最も複雑と思われる古市・百舌鳥古墳群では、大型墳の周囲に散在する中型墳あるいは陪塚にB1類がみられる。陪塚と考えられる古墳がほとんど見当らない馬見古墳群[25]では、城山二号墳・於古墳など小型主墳[26]にみられ、その古墳の絶対数も古市・百舌鳥古墳群よりも少ない。B1類はA1類より劣ると考えられるが、前述したようにその社会的位置付けは非常に困難である。野中古墳のB1類と城山二号墳のB1類が同じ性格を持つ被葬者である、と考えるのは無理がある。両者の古墳を総合的に把え、相対的な上・下の序列を想定しなければならない。

以上より、兵家古墳群のA1類墳は本質的に首長墳として把握することができる(時期的に一二号墳もA1類と同等の扱いができる)。

大型古墳と小型古墳の間には墳丘規模・埋葬施設などの古墳造営に注ぐ労働力に歴然とした隔差があり、遺物出土量においても明瞭な差があるので、両者が全く同一の性格を持っている訳ではない。甲冑・武器・農工具などの大分類において両者があてはまっても、より細かい分類である個々の副葬品の種類や、その量で異なっているのはどのように考えればよいであろうか。

一つには、自給不可能の物資の配布を受けたり、入手できる経路を首長と同様確保していたが、配布・入手頻度が首長よりも少なく恒常的入手が困難であったと考えられる。それゆえ、副葬品の種類・量を制限せざるをえなかったといえる。

もう一つは、より上位の階層に位置する首長からの再分配、あるいは再々分配の結果、必然的に配布量が下位の人々にいくほど少なくなるので、群集墳中のA1類被葬者が制限されたとも考えられる。前者の解釈の上に立つと、中央政権の群集墳A1類被葬者への直接支配という歴史的意義が与えられ、後者は豪族による在地支配ということになる。早急に解決で

きる問題ではないので、次に葛城山東麓域の群集墳と首長墳の関わりを考察し、改めて考えたい。

葛城山東麓域はある程度のまとまりをもった群集墳（a～d群）と散在する首長墳が混在している。

中期初頭に室大墓古墳[27]が造られた。全長二四〇メートルの巨大古墳の内部施設は簡略化された竪穴式石室とその内部には整美な長持形石棺である。三角縁唐草文帯天王日月二神二獣鏡を出土している。若干遅れて掖上鑵子塚古墳である。巨勢谷地域の古墳と理解するのが妥当であろう。

新庄屋敷山古墳[28]は全長一四〇メートルを測る。周濠をめぐらし、室大墓に次ぐ墳丘規模である。中・近世の砦として利用されたので詳細は不明であるが、出土埴輪は川西編年のⅣ期である。長持形石棺も久津川車塚古墳の石棺に類似し、年代的に近似すると考えられる。中期末には飯豊陵古墳[29]が造られたことが出土埴輪からわかる。後期には二塚古墳・平林古墳・神明神社古墳がある。

以上の首長墳は古墳群を形成しない。室大墓→（神塚古墳）→新庄屋敷山古墳→飯豊陵古墳→二塚古墳→平林古墳→○→神明神社古墳という系譜が想定できる。新庄屋敷山古墳以降の古墳が葛城山麓丘陵上に位置するのに対し、室大墓は巨勢山のふもとに位置し、巨勢谷の古墳との関連が注意できる。

東麓域の群集墳を地理的にa～bの四グループに分けることができる。a群は兵家古墳群・的場池古墳群・（竹内古墳群）、b群は弥宮ケ池北古墳群・寺口和田古墳群・寺口千塚古墳群、c群は火野谷山古墳群・平岡西方古墳群・笛吹古墳群・山口千塚古墳群、d群は石川古墳群・吐田平古墳群・一言主神社西方古墳群等から構成されている。石光山古墳群は山麓から離れた独立丘陵上に位置し、石光山古墳群自体自己完結的様相があるので、本稿においては除外した。

a群中には塚畑古墳（前方後円・七〇メートル）・鍋塚古墳（円・四〇メートル）・芝塚古墳（円・三〇メートル）・宮谷山古墳（前方後円・四五メートル）および兵家八号墳の中型古墳が存在している。塚畑古墳[30]・鍋塚古墳[31]は円筒埴輪を出土し、兵家八号墳を除き、他の四古墳は低平な墳丘を有し竪穴系の埋葬施設が考えられる。宮谷山古墳[32]は葺石を有し埴輪が出土している。埴輪の凸帯は鋭く、外面調整から前期末葉に位置付けされている。兵家八号墳は前述したように後期と考えられる。これら中形古墳は兵家・的場池古墳群に先行し、群形成が六世紀前半には中型古墳も消滅し、中型古墳と群集墳の消長とがほぼ一致する。

b群中には小山古墳（前方後円・三五メートル）・寺口和田一三号墳（円・五〇メートル）の中型古墳がある。寺口和田一三号墳[33]は完全な盗掘により内容不明である。小山古墳[34]は変形四獣鏡・瑪瑙製勾玉などを出土し中期の古墳と考えられる。中型古墳として二古墳をあげたが、a群ほど明瞭にそれを把握しがたい。

第５図　葛城山東麓古墳分布図

寺口和田古墳群と弥宮ケ池北古墳群[34]は初期群集墳的様相が認められ、木棺直葬墳が中心である。寺口和田一号墳[35]は墳頂・墳丘裾に二重の円筒埴輪列を有し粘土槨を採用している。変形獣形鏡・碧玉製合子・臼玉等を出土し、中期初頭に位置付けられる。また寺口一六号墳などの小型前方後円墳も群中に存在し、群集墳を構成する古墳と中型主墳の区別は非常に困難である。すなわち、首長墳と群集墳の中間的存在である中型古墳の被葬者が群集墳造営集団と密接な関係を持っているか、あるいは、中型古墳は群集墳築造集団内の階層差を反映していると考えられる。これらの古墳は、石光山古墳群・新沢千塚古墳群などの様相から、群形成の核となったことがわかる。b群は中期初頭から後期末にいたるまで古墳が造られ、a群とは異なる。

c群・d群は、ともに横穴式石室墳を主体とし、a・b群よりも築造開始時期が若干遅れる。a群のように独立立地を示す中型古墳は存在せず、b群のように群中に中型古墳がある。火野谷山二号墳[36]、笛吹神社古墳[37]などである。発掘調査が実施されたのは、火野谷山古墳群中五基、笛吹古墳群中一五基、吐田平古墳群中四基とわずかであるので詳細は不明である。

笛吹・山口古墳群には泉森皎・菅谷文則再氏の論考[38]がある。この古墳群の営造活動は安定しているので、「多数の機能集団の複合体である墓制集団…(中略)…一種の合議体的であった」とされ、共同体的独立性が高いとされた。しかし、古墳営造行為自体非常に政治性の強いものであることや、「外部的圧力」などの抽象語の概念規定に不明瞭な点がある。造墓行為などの群集墳の内包する問題をすべて集団内で処理するには、無理があるだろう。

a群内において中型古墳が存在する一方、兵家古墳群内にもA1類墳とそれ以外の古墳の区別がある。中型古墳である兵家八号墳は支群を形成することはないが、A1類墳は支群を各々形成している。後期以降、群集墳の築造が竹内古墳群を中心として営まれるが、ほぼ同時期の中型古墳が無いということは、兵家古墳群等と社会構造が異なると考えられる。

すなわち、兵家古墳群のA1類墳は支群形成の築造契機としての役割を担うことによって各々二〜三基の古墳を築造し、A1類墳が集団に対する優越性を示しつつ、その集団から脱出されていない状況を看取できる。中型古墳の副葬内容が不明なので副葬品の対比は不可能であるが、中型古墳とA1類との間の労働力の差は、A1類墳とそれ以外の小型古墳との間の労働力の差よりも圧倒的に大きい。

的場池古墳群の場合、群としての副葬品の量は非常に少なく、兵家古墳群よりも劣った存在であるが、西支群は粘土槨の採用や埴輪の樹立にみられるごとく、首長墳的古墳の築造を目指していたことがわかる。換言すれば、前述したように西支群の優越性がうかがえる。しかし、八号墳と同等の副葬

品を有して当然である七号墳に全く副葬品がないことは、兵家古墳群に比べ、集団の絶対的な副葬品の所有量が少ないからであり、支群内の古墳被葬者の社会的な階級差は少ないと考えられる。また、古墳群としてみた場合、的場池古墳群がより劣った存在であろう。つまり、首長墳と兵家・的場池古墳群の間には中型古墳の介在が認められ、中型墳の消滅と群集墳の消滅がほぼ同時期であるので、両者には有機的関連があったと考えられる。

また、中型古墳の武器・武具が明らかでないが、次のことを推定できるだろう。兵家古墳群の武器・武具は旧式であるという指摘がある。兵家古墳群では長方板革綴式短甲が最も少なく、その年代は中型古墳の年代の上限と一致するので、中型古墳からの再分配された結果として理解したい。

したがって、A1類を小首長的性格を持つようになった有力家父長墓として理解できる。この家父長が、近藤義郎[39]・広瀬和雄氏等は生産力の増加による自立化によって、西嶋定生[41]・白石太一郎氏等はより大きな支配機構の中に組み込まれたことによって、造墓可能となったと述べている。本稿ではそれを明らかにしえないが、首長墳である大型古墳と中型古墳とによる二重の支配構造の下におかれている状況が看取された。その家父長層も、A1類とそれ以外のように、優劣の差がみられる。いわば、大型古墳をを頂点とする大規模な支配構造、中型古墳を頂点とする中規模な支配構造、A1類墳を頂点とする小規模な支配構造と理解することができる。しかし、的場池古墳群は小規模な支配構造の中でも劣る存在で、しかも、一古墳の優越性は見られず社会分化が未発達といえる。

b～d群内に独立的立地を示す中型古墳は非常に少なく、群集墳内に取り込まれた状況である。これはa群で考察したような中規模の支配構造の欠如を示し、共同体内の階層分化がより進んだ状態を示している。

しかし、b～d群内の各群集墳の構造は均一なものではなく、一括で扱うのは問題がある。しかも、詳細な考察を本稿ではおこなっていないので、b～c群の結論は単なる推測の域を出ないが、少なくとも、a群とは異なる支配(社会)構造を持っていたと考えられる。

× × × × × ×

本稿で用いた副葬類型から群集墳を考察するという方法論は、寺沢知子氏が用いたのみである。寺沢氏は地域設定を不十分におこなわなかったことや、問題を群集墳内で処理しようとしたことにより、十分な成果をあげることはできなかったと思われる。一方、京都大学考古墳研究会が「嵯峨野の古墳時代」(一九七一年)において、モデル設定した嵯峨野は地域的に非常に限定されており、文献の裏付けも確実なので、かなりの成果をあげることができた。

本稿は多くの問題を内包し、いくつかの前提に論を進めて

いる。先学諸兄の御批判・御叱責を頂ければ幸いである。

なお、本稿は学部卒業論文において方法論の呈示をおこない、関西大学文学部日本史関係合同研究会の発表でその具体的検討をおこなったものを、加筆、修正したものである。日頃から御指導頂いている網干善教先生をはじめとして、石野博信・泉森皎・伊藤勇輔・一瀬和夫・田中晋作・服部聡志氏および考古学研究会の諸氏に御教示・御助言をいただき、記して謝意を表します。

註① 石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」、『東アジア世界における日本古代史講座』四、一九八〇年。

② 関川尚功「群集墳をめぐる諸問題」『桜井市外鎌山北麓古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十四冊)、一九七九年。

③ 寺沢知子「初期群集墳の一様相」『考古学と古代史』、一九八二年。

④ 近藤義郎著『前方後円墳の時代』、一九八三年。

⑤ 都出比呂志「横穴式石室と群集墳の発生」、『古代の日本』五、一九七〇年。

⑥ 厳密な意味において、棺内遺物と棺外遺物の類型的区別は不可能である。しかし、本来的な遺物の意味を把え、意識的に区別することによって類型の単純化が可能である。したがって、棺内出土の武器・武具等は棺外遺物として、棺外出土の鏡等は棺内遺物として処理した。

⑦ 森浩一・石部正志「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』第三〇号、一九六二年。

⑧ ここに提示した主体部数は比較的残存状況のよいものである。

⑨ 伊藤勇輔「兵家古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第三十七冊、一九七八年。

⑩ 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第六四巻第二号、一九七九年。

⑪ 一瀬和夫他「允恭陵古墳外堤の調査」、大阪府教育委員会、一九八一年。

⑫ 田中晋作「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『ヒストリア』第九三号、一九八一年。

⑬ 白石太一郎・河上邦彦他「葛城・石光山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第三十一冊、一九七六年。

⑭ 兵家古墳群において、棺内出土須恵器の例はない。

⑮ 小林行雄「竪穴式石室考」『古墳文化論考』所収、一九七六年。

⑯ 従来「小型竪穴式石室」と称されているが、本稿において小型の竪穴式石室と区別するためにこの用語を使用した。

⑰ 上田宏範・伊達宗泰他「大和二塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第二十一冊、一九六二年。

⑱ 白石太一郎「畿内における大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』第四二・四三合併号、一九六六年。

⑲ 伊藤勇輔「的場池古墳群」『当麻町文化財調査報告』第一集、一九八二年。

⑳ 橿原考古学研究所「今田古墳群」『一九八二年度概報集』、一九八三年。

㉑ 楠元哲夫『奈良県文化財調査報告書』第二十五集、一九七六年。

㉒ 伊達宗泰他「新沢千塚古墳群」『奈良県 史跡名勝 天然記念物調査報告』第三十九集、一九八一年。
㉓ 伊達宗泰「和爾上殿古墳」『奈良県 史跡名勝 天然記念物調査報告』第二十三集、一九六六年。
㉔ 橿原考古学研究所「タニグチ一号墳」『速報展示資料』、一九八三年。
㉕ 前園実知雄他「馬見丘陵における古墳の調査」『奈良県 史跡名勝天然記念物調査報告』第二十九冊、一九七四年。
㉖ 田中晋作「古墳群の構造変遷からみた古墳被葬者の 性格」『古代学研究』第九八・九九号、一九八三年。
㉗ 網干善教「室大墓」『奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告』第十八冊、一九五九年。
㉘ 菅谷文則他「新庄屋敷山古墳」、奈良県教育委員会、一九七五年。
㉙ 土生田純之「埴口丘陵外堤護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第三二号、一九八〇年。
㉚ 泉森皎「当麻町史」考古編。
㉛ 橿原考古学研究所「竹内鍋塚古墳発掘調査概報」、一九七九年。
㉜ 橿原考古学研究所「寺口和田古墳群・第二次発掘調査 概報」、一九八二年。
㉝ 橿原考古学研究所附属博物館「葛城の古墳と古代寺院」、一九八一年。
㉞ 橿原考古学研究所「日本道路公団南阪奈道路計画に伴なう当麻町太田地区予備調査」、一九七九年。
㉟ 橿原考古学研究所「寺口和田古墳群 発掘調査概報」、一九八一年。
㊱ 松田真一他「奈良県文化財調査報告書」第三十一集、一九七九年。
㊲ 坪井良平「大和国笛吹社の古墳」『考古学雑誌』三巻七号、一九一二年。
㊳ 泉森皎・菅谷文則「大和葛城の笛吹・山口 古墳群の 分布」『古代学研究』第六〇号、一九七一年。
㊴ 近藤義郎「佐良山古墳群の研究」津山市、一九五三年。
㊵ 広瀬和雄「群集墳論序説」『古代研究』第一五号、一九七八年。
㊶ 西嶋定生「古墳と大和政権」『岡山史学』第一〇号、一九六一年。
㊷ 白石太一郎「大型古墳と群集墳」『橿原考古学 研究所紀要・考古学論攷』第二冊、一九七三年。

（関西大学大学院生 [redacted]）